

国語辞典を活用した国語科の授業について

—— 説明的文章教材を中心に ——

横 田 陽 一

一 はじめに

絶海 孤島 無数 火口 遺せき 分せき
ほ乳動物 生息 まったただ中 野生化
またたく間 わざわい ささいな 開こん
しだいに 無尽蔵 敬う てこ ころ はん栄
持続的 供給 さまたげる 天敵 はんしよく
もたらす 地表 やせ細る ふるう 深く
おちいる 健全 あれ果てる 悲さん めぐらす
早急

これらは、東京書籍『新しい国語』六年上所収、鷺谷いづみ「イースター島にはなぜ森林がないのか」を学習した際に、現任教である益田市立桂平小学校第三学級

(第五・六学年複式学級) 七名の児童が国語辞典を使って意味調べをした三十六の言葉である。「絶海」「孤島」「無尽蔵」など、児童の日常の言語生活の中で使用されることのほとんどない言葉が並ぶ。

平成二十年改訂『小学校学習指導要領』第二章各教科第一節国語、第五学年及び第六学年の「C 読むこと」の「ウ 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」の解説には説明的な文章の解釈について次のように記されている。(注1)

ウ 説明的な文章の解釈に関する指導事項

中学年の「イ 目的に応じて、中心となる語や文を

とらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。」を受けて、目的に応じて、文章の要旨をとらえたり、自分の考えを明確にしながらかつ読んだりすることを示している。

要旨は、書き手が文章で取り上げている内容の中心となる事柄、あるいは、それについての書き手の考えの中心となる事柄などである。「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえ」とは、目的に応じて、何のために、どのようなことが必要かなどを明確にした上で、文章の重要な点を表現に即して的確に押さえ、求められている分量や表現の仕方などに合わせてまとめることである。文章の内容を的確に押さえるためには、文章に書かれている話題、理由や根拠となつている内容、構成の仕方や巧みな叙述などについて注意することが大切である。

(傍線は引用者)

このように、高学年段階では、説明的な文章の内容を的確におさえ、その要旨をとらえること、さらに自分の考えを明確にしながらかつ読むことが求められている。内容を的確におさえ、その要旨をとらえるためには、少なくとも文章中の言葉の意味と用法を理解しておかなければならない。

私はこれまでの説明的な文章の授業実践において、物語的な文章に比べて児童の興味・関心が低いと感じるこ

とが多かった。それは、文章中の言葉の意味が分からず、内容が的確にとらえられていないからではないかと考えた。そこで、出会ったのが深谷圭助氏の著書『7歳から「辞書」を引いて頭をきたえる』(注2)である。

本稿では、深谷氏の提唱する「辞書引き学習法」をもとに、国語辞典を活用した国語科の授業について、とくに説明的な文章教材の実践を紹介する。なお、本稿で紹介するのは、おもに前任校である大田市立静間小学校での実践であることをはじめにお断りしておく。

二 平成二十年度の実践(六年生13名)

〈児童の実態と国語辞典の活用について〉

本学級は、国語科の学習では、文学的文章で登場人物の心情を読み取ったり、説明的文章の要旨をとらえたりする活動に困難が見られる児童が多かった。また、読み取ったことから自分の感想を持つたり、自分の考えを表現したりする力が十分とは言えず、四月に実施された全国学力調査の結果を見ると、全体の達成率では全国や大田市と比べ大きな差は見られないが、国語B(主として活用)の正答数が50%を下回っている児童がおり、内容別に見ると、「目的に応じて情報を読み取り、分かつたことや自分の考えを明確に書く」問題の正答率が33.3%にとどまっているという実態であった。国語辞典は、国語科に限らず意味の分からない言葉に出会ったときには調べてもよいこととしていたが、「辞書引き学習

法」は取り入れていない。

〈説明的な文章教材の実践〉

第六学年学習指導案

1. 単元名 いろいろな言葉について調べよう

教材名 「言葉の意味を追って」

(東京書籍『新しい国語』6年下)

2. 目標

- ・言葉や辞典に関心を持ち、文章を読んだり辞典作りをしたりすることができる。(関心・意欲・態度)
- ・自分の考えを明確にして話し合うことができる。(話すこと・聞くこと)
- ・身近な生活にかかわる言葉を集めて辞典を作ることができる。(書くこと)
- ・文章の構成に注意して読み、国語辞典や辞典作りについて述べられていることを読み取っている。
- (読むこと)
- ・文や文章にはいろいろな構成があることについて理解することができる。(言語事項)

3. 単元計画 (全15時間)

次		時		学 習 活 動																					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15											
一		二		三		四		五		六		七		八											
○ 教材文を通読し、初発の感想を持つ。		○ 新出漢字や語句の意味を調べ、		○ 教材文の構成をとらえ、冒頭から国語辞典についての説明を読み取る。		○ 「広辞苑」の特徴を読み取り、二つの問いに着目し、学習の見直しを持つ。		○ 「辞苑」出版から改訂作業、空襲による活字組み版の焼失を経て作業が再開されるまでの流れや新刊の辞典作りについて読み取る。		○ 原稿完成と見直し、基礎語の説明の書き直しを経て「広辞苑」が出版されるまでの流れや新村親子の辞典作りについて読み取る。		○ 読み取ったことをもとに、国語辞典作りについて分かったことをまとめる。		○ グループごとに、どんな辞典を作るかについて話し合う。		○ 分担して言葉を探し、見出し語の説明の観点を考えて「見出しカード」を作る。		○ 説明の観点をもらさないように気をつけて見出し語の説明を書く。		○ 書いた文章を読み合い、友達の手紙を参考にして説明がよく分かるように修正する。		○ 「見出し語カード」を分類し、載せる順番を決め、辞典を完成させる。		○ 完成した辞典をお互いに読み合い、感想を伝え合う。	

4. 実践の考察

ここでは第9時について述べる。本時では、教材文から辞典作りに生かしたいことを探し出す活動を行なった。この課題は教材文の読解と次の学習課題である「辞典作り」を結びつけるものである。始めに国語辞典作りの作業の過程を確認し、教材文から読み取ったことを自分たちの辞典作りによろしく生かすかを具体的に考えさせ、探し出したことの中から自分たちのグループの辞典作りに生かしたいことを発表し合い、次時からの活動の見通しを持たせることをねらいとした。

単元の導入で学習の見通しを持たせるためにグループごとに辞典作りをすることを伝えていたが、児童の辞典作りへの意欲を高める工夫が不十分だったため、課題への意欲を高めることができなかった。教材文全体を読み返して辞典作りに生かしたいことを探すという活動は、全国学力調査の結果分析で明らかに「目的に応じて情報を読み取り、分かったことや自分の考えを明確に書く力」が弱いという実態から、やや難しい課題だったようで、個人作業では生かしたいことを探し出すことができない児童や自分の考えに自信が持てない児童の姿が見られた。そこで、途中でグループ活動を取り入れた。

グループ活動に切り替えたことで、個人の力で探し出すことが困難だった児童も意欲が高まり、積極的に発言していた。また、友達が自分と同じ考えを持っていることが分かり、自分の考えに自信を持つことができた児童も

いた。グループで話し合ったことを全体で確認する場面では、探し出したことをただ順番に発表させるのではなく、具体的にどのような生かしていくのかを自分の言葉で語らせるようにした。

また、話し合いの中で、教材文の次のような記述について取り上げた。

C：第9段落の「それぞれの分野の知識を持っている専門家に協力をおおぐ。」というところが辞典作りに生かせると思う。

T：みなさんの辞典作りでいう「専門家」とはどのような人だろう。

C：そのことに「くわしい人」に聞けばいいんじゃないかな。

このように教材文の表現を児童にも分かりやすい言葉に置き換えることで、「自分たちの辞典作りに生かしたいことを探す」という本時のねらいをより意識させることができたのではないかと思う。同時に、児童の語彙を増やすことの必要性をあらためて痛感した。

三 平成二十一年度の実践（五年生11名）

「辞書引き学習法」の導入と「国語辞典クイズ」の実施

本学級は、第三学年時に私が担任し、国語辞典の使い

方を指導した児童たちであった。その際には、国語辞典の構成や言葉の意味の調べ方など基本的な事項について学習したが、前年度の実践の課題を踏まえ、前掲の深谷氏の著書をもとに、新たに「国語辞典の使い方」について次のような方法を児童に提示した。

「国語辞典の使い方」

- 調べた言葉が載っているページに付箋紙を貼る。
- 付箋紙には、通し番号と調べた言葉を書き込む。
- 国語辞典は常に近くに置き、意味の分からない言葉に出会ったときは、いつでも調べてよい。

児童一人には、付箋紙（5 cm×7.5 cm 大、約100枚綴り）を一束ずつ配布し、付箋紙がなくなったら新しい束を追加するようにした。付箋紙には通し番号をつけ、その下に調べた言葉を書き込んでおくようにする。通し番号をつけることで自分がどれくらいどの数の言葉を調べたのか、国語辞典をどれくらい活用したのかということが分かる。はじめは付箋紙に書き込んで国語辞典に貼る作業に時間がかかるが、徐々に慣れていくと、どの児童も短時間で書き込めるようになった。国語辞典は国語科の授業に限らず常に机の上に置くようにし、いつでも国語

辞典を使用してもよいこととした。

「辞書引き学習法」の導入に合わせ、国語辞典と言葉への興味・関心を高める手立てとして、学級朝礼で「国語辞典クイズ」を始めた。

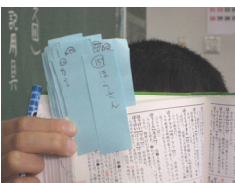
まず、出題者（日直）が国語辞典をランダムに開き、開いたページの中から出題する言葉を選び、はじめの文字を知らせる。次にその言葉の意味や用例を読み、解答者は出題された言葉を当てるというものだ。答えが出にくいときは、文字数や終わりの言葉などヒントを追加してもよい。はじめは誰もがよく知っている言葉を選んでいた児童も、回数を重ねるにつれ、難しい問題を出そうと児童の日常生活では聞きなれない言葉を出題するようになった。

この「辞書引き学習法」と「国語辞典クイズ」により、児童にとって国語辞典がより身近なものになり、言葉の意味を調べて新しい語彙を獲得することへの意欲が高まっていた。

【児童の国語辞典】



【付箋紙の記入例】



〈説明的な文章教材の実践〉

本指導案は、平成二十一年九月十日、浜田教育事務所の学校訪問指導を受けた際のものである。当時静岡小学校では、「自分の思いや考えを持ち、ともに高め合う児童の育成—国語科から広がる学校図書館を活用した学習の充実—」の研究主題のもと校内研究を進めており、本指導案もその研究にかかわる実践である。

第五学年国語科学習指導案

1. 単元名 人間と自然とのかかわりについて考えよう

教材名 富山和子「森林のおくりもの」

(東京書籍『新しい国語』五年下) (読書指導)

2. 単元の目標

- 人間と自然との関係に関心を持ち、教材文や関連する本を進んで読む。(関心・意欲・態度)
- 教材文や読んだ本について、筆者の考えを踏まえ、自分の感想を書く。(書くこと)
- 題名や筆者の述べ方に注意して、文章の要旨や筆者の考えを読み取る。(読むこと)
- 文や文章にはいろいろな構成があることについて理解する。(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

3. 指導にあたって

○ 本学級の児童は、男子5名、女子6名、計11名である。新しく学習することに積極的に取り組んだり、考えを進んで発表したりする児童が多い。

国語科の学習でも意欲的に取り組む児童が多いが、島根県学力調査の意識調査によると「国語の勉強は好きだ」という設問に対して約60%の児童が否定的な回答をしている。本学級では、国語科の学習を中心に、語彙を増やすことと辞書を使って調べることへの抵抗感を減らすことを目的に、国語辞典で自分が調べた言葉に付箋紙を貼るという活動を取り入れている。はじめは調べたい言葉を探すのに時間がかかっていた児童も少しずつ検索時間が縮まってきている。また、調べた成果が付箋の数として目に見えて分かることから友達と競い合つて言葉を調べたりする姿も見られる。また国語科以外の学習でも自分から国語辞典を準備し、意味の分からない言葉を選んで調べている児童もいる。

読書活動については、毎週末に読書を宿題とし、読書ノートに題名・筆者名・感想を記録する活動に取り組んでいるが、毎週欠かさずノートを提出できる児童と全く提出しない児童がおり、家庭での読書習慣の定着には至っていない。また、1学期に実施した「読書アンケート」には次のような傾向が見られる。

1. あなたは、読書をするのが好きですか。
(学習マンガも含む)

5	とても好き	4	好き	3	あまり好きではない	2	嫌い
---	-------	---	----	---	-----------	---	----

2. あなたは、普段どのくらい本を読みますか。

3	ほとんど毎日	2	週に3〜4日	1	週に1〜2日	0	ほとんど読まない
---	--------	---	--------	---	--------	---	----------

3. あなたの好きな読書活動は、どれですか(複数回答可)

4	読み聞かせ	3	朝読書	2	自由読書の読書	1	家で読む	0	その他
---	-------	---	-----	---	---------	---	------	---	-----

4. あなたは、週にどのくらい図書コーナーで本を読んだり調べたりしていますか。

0	ほとんど毎日行く	1	週に3〜4日行く	2	週に1〜2日行く	3	ほとんど行かない
---	----------	---	----------	---	----------	---	----------

ほとんどの児童が「読書が好き」と回答しているが、「ほとんど毎日読書する」児童はおらず、図書コーナーにほとんど行かないと回答した児童が六名である。また、朝読書の様子や図書コーナーで借りている図書の傾向を見ると物語を好んで選んでいる児童が多い。読書の習慣づけ、幅広いジャンルの読書への意欲付けが課題といえる。

○ 本教材は、序論(日本人と「木のくらし」)・本論

一(木材の利用)・本論二(森林の働き)・結論(かけがえのない遺産としての森林)から成り、題名にもなっている「おくりもの」をキーワードに森林と人間生活との関係について述べた説明文である。日本人が豊かな森林の恵みを生かし築いてきた「木のくらし」、その森林からの「おくりもの」として筆者は、本論一で「木材として利用」「紙の利用」「火(燃料としての利用)」の三つの観点、本論二では「水を保つ働き」「山崩れと水害から平野を守る働き」「豊かな土壌を供給する働き」の三つの観点でそれぞれ整理し、自分の考えを交えながら具体的な事実に基づいて説明を進めている。また、結論でも「森林はだれのおくりものか」と読者に問いかけ、森林の大切さを考えながら読めるようになっていく。児童は、普段の生活で日本が豊かな森林に恵まれた国だということを意識することは少ない。教材文を通して自分たちの暮らしが森林にどのように支えられているのかを考えたり、筆者の問いかけについて予想しながら読んだり自分の考えを持ちながら読んでいくことで、自分たちの生活と森林とのかわりに気づくに適した教材と考えられる。また、教材文の筆者による人間と自然とのかわりに関する本が他にも出版されており、児童が読み広げていくのに適している。

○ 本単元の指導にあたっては、総合的な学習の時間の調べ学習で活用した図鑑や事典などの図書からの情報収集ではなく、説明的文章を読み、読み取った筆者の考えを踏まえて人間と自然とのかかわりについて考えさせたい。また、物語文を好んで読んでいるが、読書の習慣づけや幅広いジャンルの読書への意欲付けが課題であるという児童の実態を踏まえ、教材文や筆者との出会いである導入を大切にしたいと考えている。

児童は、一学期から総合的な学習の時間において、環境問題について自分の学習課題を立て調べ学習をしている。また、エコ係を中心に自主的な活動にも取り組んでおり、環境問題に対する関心が高い児童も多い。

本時では、単元全体の導入として、総合的な学習の時間の課題作りや調べ学習について振り返り、自然と人間とのかかわりについて興味が持てるようにする。次に自然と人間とのかかわりに関する本を多く著している富山和子について児童に紹介し、その著作の一つである「森林のおくりもの」を読み、富山氏の考えを読み取っていくことを話し、「森林のおくりもの」という題名から書かれている内容について予想し、思いついたことを付箋紙に思いつく限り書き出す。書き出したことを一人一枚ずつ発表し、交流する。児童が発表した言葉は、短冊に書いて黒

板に貼り付けていく。その際、同じ言葉や似ている言葉、かかわりのある言葉などを全員で吟味しながら分類し並べ替えていく。そして再度時間をとり、付箋紙に言葉を書かせる。その際、友達の言葉から発想したことも取り入れるように促し、自分のワークシート上で黒板のように分類して付箋紙を並べ替えるようにして、題名から連想するイメージマップを完成させる。完成したイメージマップは黒板に掲示し、全員で読み合う。最後に、そのイメージマップから各イメージに関連する本があることをブックトークで紹介し、読み広げの意欲を高める。

教材文の読み取りについては、まず序論・本論一・本論二・結論という文章全体の構成をつかむ。そして、内容のまとめりに接続語や文末表現などに注意しながら文章の構成をつかみ、「問い」の文とそれに対する「答え」の部分やキーワードとなる言葉に線を引いたりして、まとめりと筆者の主張を読み取っていくようにする。学習して読み取ったことや分かかったことは付箋紙に書き込み、第一時で作成したイメージマップに貼り付けていくようにする。

教材文の読み取りを終えた後、同じ筆者による著作や人間と自然とのかかわりについて述べられた本を読み紹介文を交流することで、説明的な文章を進んで読み読書の幅を広げるきっかけづくり

としたい。また、本単元の学習と並行して、総合的な学習の時間の調べ学習も進め、関連づけた学習となるよう支援していきたいと思う。

4. 単元の評価規準

D 関心・意欲・態度	B 書くこと	C 読むこと	E 漢字・仮名の性質
森林と人間との関係に関心を持ち、教材文や関連する著作を進んで読もうとする。	教材文や読んだ本について筆者の考えを踏まえ、自分の感想を書いている。	題名や筆者の述べ方に注意して、文章の要旨や筆者の考えを読み取っている。	漢字や文章にはいろいろな構成があり、理解する。

5. 単元計画（全14時間 本時 1 / 14時）

第二次（考える）			第一次（つかむ）		次
7	6	5	3・4	2	1
○木が木材になっても生きていたり木材そのものの用途についてまとめ	○日本人の「木のくらし」について読み取り、木材の性質と使われ方をまとめる。	○教材文全体の構成をつかむ。	○新出漢字や語句の意味を調べる。	○教材文を通して初めて知ったことや疑問に思ったことなどを中心に感想を書く。	○題材から教材文の内容を予想し、単元全体の学習の流れをつかむ（本時）
○木が木材になっても生きていたり木材そのものの用途についてまとめ キーワードとなる言葉に注目するよう「助言」したり、筆者の「問い」の言葉に気づかせ、身近な生活と結びつけて考えたりに促す。	○日本人の「木のくらし」について読み取り、木材の性質と使われ方をまとめる。 具体例として挙げられている木の名前と特徴を書き出し、接続語を手がかりにそれぞれの性質と使われ方をまとめるよう指示する。	○教材文全体の構成をつかむ。 まともなことに見出しをつけ、文章全体の構成をつかむようにする。	○新出漢字や語句の意味を調べる。 何度も教材文を読み返し、分からない言葉を、国語辞典を用いて調べることができる。（ノート）	○教材文を通して初めて知ったことや疑問に思ったことなどを中心に感想を書く。 言葉や文に線を引ながら読むように助言する。	○題材から教材文の内容を予想し、単元全体の学習の流れをつかむ（本時） 付箋紙に連想した言葉を書くことが難しい児童には、具体例を挙げたり、会話をしながら言葉を引き出したりして意欲を持たせる。
C 木が切られても生きていたり木材そのものの用途について読み取っている。（発言 ノート）	C それぞれの木材について、性質とその性質を生かした使われ方を読み取っている。（発言 ノート）	E 文章全体の構成を理解することができている。	E 意味の分からない言葉を、国語辞典を用いて調べることができる。（ノート）	D 教材文に関心をもち、自分の感想を持つ。（ノート）	D 人間と自然との関わりについて関心を持ち、進んでイメージマップを作っている。 観察・発表、イメージマップ

第四次 (振り返る)	第三次 (広げる)				
14	13	12	10・11	9	8
○本単元の学習を踏まえ、自分の考えを書	○本の紹介文を発表し合う。	○読んだ本の紹介文を書く。	○教材文に関連する本を読む。	○結論を読み、筆者の考えをまとめる。	○森林の「別のおくりもの」とは何かを読み取る。
学習全体を通して分かったことや疑問に思ったこと、もつと調べてみたいことなどポイントを絞って書くよう助言する。	児童が発表しやすいうようにグループでの発表にする。	筆者の考えに対してどう思うか、本を読んで知ったことや疑問に思ったことなどを中心に書くよう助言する。	筆者の関連する著作や同じテーマの本をあらかじめ準備し、児童が選択できるようにする。	文末表現に着目し、筆者の考えをまとめるよう助言する。	文末表現に目を向けて、「問い」の文とそれに対する「答え」がどこに書かれているかに注意する。とともに、キーワードを探しながら読むよう助言する。
B 教材文や読んだ本から分かったことや筆者の考えを踏まえて自分の考えを書くこととして。 (ノート)	D 紹介文を進んで発表したり、友達を発表を聞き取りしている。(観察、発表)	B 読んだ本の紹介文を、筆者の考えを踏まえて書くこととして。 (ノート)	D 教材文に関連する本に興味を持ち、進んで読もうとしている。(観察)	C 筆者の考えを読み取っている。(発言、ノート、イメージマップ)	C 森林の「別のおくりもの」とはどんなものか読み取っている。(発言、ノート)

6. 研究の視点

○ 題名から書かれている内容を予想しイメージマップに表し分類することは、教材文や関連する本への興味・関心を高める出会いの場として有効であったか。

7. 本時の学習

(1) ねらい

○ 教材文の題名から書かれている内容を予想してイメージマップを作ること、教材文や関連する本への興味・関心を高める。

(2) 展開

学習活動	支援
<p>○ 環境問題について学習してきたことを振り返る。</p> <p>○ 「森林のおくりもの」には、どのようなことが書かれているか予想しよう。</p> <p>○ 本時の学習課題を知る。</p> <p>「森林のおくりもの」には、どのようなことが書かれているか予想しよう。</p> <p>(学習の流れ)</p> <p>① 題名から内容を予想し、思い付いたことを付箋紙に書き出す。(個人で)</p> <p>② 書き出したことを発表する。(一人一枚)</p> <p>③ もう一度付箋紙に思い付いたことを書き、イメージマップを作る。</p> <p>④ 完成したイメージマップを読み合う。</p>	<p>・ 総合的な学習の時間を出し合った課題をまとめた模造紙を掲示したり、自分の学習課題について発表させたりして振り返るようにする。</p> <p>・ 学習の流れを黒板に掲示し、見通しを持たせる。</p>

<p>○ 「森のおくりもの」という題名から連想する言葉を付箋紙に書き出す。</p> <p>○ 付箋紙に書いた言葉を一人一枚ずつ発表する。</p> <p>○ もう一度付箋紙に言葉を書き出し、分類してイメージマップを完成させる。</p> <p>○ 完成したイメージマップを読み合う。</p> <p>○ 単元全体の学習の流れを考える。</p> <p>○ 次時からの学習の見通しを持つ。</p>	<p>・付箋一枚に思いついたことを一つ書くように指示する。付箋紙は五枚ずつ配布し、足りない場合は必要な枚数だけ取るように指示する。</p> <p>・付箋紙に連想した言葉を書くことが難しい児童には、具体例を挙げたり、会話しながら言葉を引き出したりして意欲を持たせる。</p> <p>・児童が発表した言葉は、短冊に書き、同じ言葉や似ている言葉、かかわりのある言葉などを全員で吟味しながら分類しながら黒板に貼り付けるようにする。</p> <p>・友達言葉から発想したことも取り入れるように促す。</p> <p>・まとまりごとに線をつないだり、囲ったりしてもよいことを伝える。</p> <p>・イメージマップを黒板に掲示し、友達を考えをおおまかにとらえる程度にとどめる。</p> <p>・ブックトークを行い、関連する本の読み広げへの興味関心を持たせる。</p>
---	--

(3) 本時の児童の具体的な姿と支援

観点	十分満足できると判断される児童の姿	おおむね満足と判断される児童の姿	努力を要すると判断される児童の姿と支援
D	人間と自然とのかわりに関心を持ち、進んで自分の考えを発表したり友達の考えを取り入れたりして、意欲的にイメージマップ作りに取り組んでいる。	人間と自然とのかわりに関心を持ち、題名から内容を予想して、進んでイメージマップを作っている。	付箋紙に連想した言葉を書くことが難しい児童には、具体例を挙げたり、会話しながら言葉を引き出したりして意欲を持たせる。

(4) 視点

「個人思考→全体→個人思考」という学習展開は、児童の学習意欲を高める手だてとして有効であったか。

8. 実践の概要と考察

本単元では、読書の習慣づけや幅広いジャンルの読書への意欲付けを図るため、教材文や筆者との出会いである導入にブックトークを設定した。紹介する図書は、テーマを環境問題と広義に捉え、より多くの図書を準備・紹介することも考えられたが、説明的な文章よりも物語を好んで読んでいるという児童の実態を踏まえ、教材文の筆者の関連図書を中心に、教材文のテーマである「人間と自然とのかわり」に関連したものを選定した。紹介した本は学級に置き、単元の学習中も自由に読めるよ

うにしたので、朝読書で読んだり家庭に持ち帰って読んだりする姿が見られた。

本時では、題名から内容を予想しキーワードをイメージマップに表すことで、教材文や関連する本への興味・関心を高めることをねらいとしていたが、次々に思いついた言葉を付箋に書き出していく児童と予想することが難しく全く付箋に書き出すことができない児童との差が大きかった。また、書き出したことを交流する場面では、発表を一人一枚ずつと制限したこと、教師主導で分類・整理してしまったことで、児童同士のかかわりの場が持たず、思考を深めることができなかった。教材文への興味・関心と関連する本への興味・関心という二つのねらいが混在していたため、本時でどんな国語の力をつけたのかということがばやけてしまっていたように思う。

【第1時のイメージマップ】



【第2次終了時のイメージマップ】



第三次では、同じ筆者による著作や人間と自然とのかわりについて述べられた本を読み紹介文を交流する活動を設定した。家庭での読書習慣が十分身に付いているとはいえないので、単元計画の中にじっくりと読書できる時間を確保した。多くの児童が複数の本を読み、紹介する本を選んでいった。読書の際には、キーワードとなる言葉や筆者の考え、大切だと思った箇所には付箋を張りながら読むようにし、読後に読書ノートに書き写すようにした。書き写したものをもとに自分の考えを踏まえて紹介文を書くように助言した。このような手順を踏むことで紹介文を書くことへの抵抗感が軽減できたのではないかと考える。また、読書や紹介文を書くときにも、常に傍らに国語辞典を置き、言葉の意味を調べながら読書したり文章を書いたりするようになっていった。

本単元では、お互いに読んだ本の紹介文を交流することを目的にしていたが、学習発表会で国語科や社会科、総合的な学習の時間での環境学習の成果について発表した。児童が書いた紹介文と本を学級前に掲示し、他の学級の児童や保護者・地域の方へも学習の様子を紹介した。目的意識を持たせることで読書の意欲も高まっていったのではないかと思う。

四 おわりに

本年度の学級でも、「辞書引き学習法」と「国語辞典クイズ」を取り入れている。国語科の授業は、A・B年

度方式の単元計画で、第五学年と第六学年の内容を二年間で学習している。児童は、「辞書引き学習法」にも慣れ、「言葉の意味が分からないときにはまず自分で国語辞典を引いて調べる」ということが定着しつつある。また、「国語辞典クイズ」では、始めたころは日常生活でよく使う言葉を問題として選んでいたが、あまり聞いたことのない、自分でも使ったことのない言葉を問題に出す児童が増え、言葉の意味をしっかりと聞き取ろうとする姿も見られる。

国語辞典を活用し、たくさんの言葉の意味を調べれば、語彙が増えるというものではない。児童は話を聞くことや読書などの言語活動をともなうて、少しずつ語彙を増やし、言葉を獲得していく。そして、獲得した言葉を自分で話したり書いたりするなど、日常の言語生活で使うことができはじめその言葉の意味を理解したといえるのではないだろうか。今後も、児童の言語生活を豊かにする道具の一つとして国語辞典を活用し、実際の言語生活の中で生きてはたらく国語力の育成を目指して、実践を積み重ねていきたいと思う。

本稿は、二〇一〇年七月三十一日、第二十八回島根大学国文学会研究発表会フォーラム「わたしの国語教室」において発表した内容を再構成したものである。実践発表を通して、参加者の皆様から大変貴重なご意見をうかがうことができ、その後の実践にいかすことができた。今回実践発表の機会を与えてくださった福田哲之先生に

この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

注(1) 文部科学省編『小学校学習指導要領解説 国語編』(東京) 洋館出版社 二〇〇八) p. 88～89

(2) 深谷圭助『7歳から「辞書」を引いて頭をきたえる』(すばる舎 二〇〇六)。なお、深谷氏の「辞書引き学習法」については、日本経済新聞電子版『親子で体験「辞書引き学習」 話題の勉強法の効果は?』(二〇一〇年六月六日) 他各種メディアで多数取り上げられている。また、深谷氏自身も『深谷圭助公式ブログ「辞書引き学習」』<http://ameblo.jp/fukawayajishobiki/>を開設し、さまざまな実践を紹介している。

(益田市立桂平小学校教諭)